
タイトル未定（仮）

種G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル未定(仮)

【Nコード】

N5112V

【作者名】

種G

【あらすじ】

高校生最後の思い出作りとして高校で七不思議をする事となった主人公と3人の友人。だが、最後の不思議”サヨナラの鏡”を試した結果、主人公たちはばらばらに異世界に飛ばされてしまう。主人公はこの世界にいると思われる友達を探しながら、元の世界に戻るために”魔女”と契約をする。

プロローグ(前書き)

駄文です。

プロローグ

ことの始まりは、俺の仲間内での思い出作りの一環だった。

高校生である俺たち4人組は、”高校生であるうちにやりたいことを片っ端からやっていった。”

楽しいことなら何でもやったし、バカなこともたくさんやった。

そんな俺たちももう2年生。しかも春休みで実質3年生だ。

3年生になれば、もうそんな事してる余裕はない。みんなわかってた。だから、高校生としてできる最後の”楽しい事”には、みんな乗り気だった。

「しっかしまあ、よく学校に泊まる許可なんて下りたなあ」

良識持ちのタクマが言った。

高校生最後のイベントは、”学校でお泊り会”だった。

「こんな事もあるのかと、天文部に入部しておいたんだ」

このイベントを企画したユウキが答えた。なんだかんだで毎回準備に手間がかかることをやってくれる。ただ、

「でも、俺は入部届けを出した記憶がないんだけど？」

俺がそう聞くと、ユウキが

「バレ無きゃいいんだよ」

と、すばらしすぎる答えをくれるあたり、用意周到なのかどうかは微妙なところだ。

「まあ、バレ無きゃいいなら大丈夫だろ。多分」

と、楽天家のダイキが言ったところで俺も深く追求するのはやめた。やっちゃったもんはしょうがない。毒をくうなら机ごといつちゃうノリでやってきた。今回もそれでいいと考えた結果だった。

「で、何をするんだ？まさか本当に星を見るわけでもあるまい？」

俺はユウキにたずねた。ユウキは良くぞ聞いてくれました！って顔して

「高校生最後のイベントはな、学校の七不思議だ！」
と宣言した。

つい微妙な顔しちゃったのは仕方ない事だと思う。

「…あれ？3人とも乗り気でない？」

微妙な空気が流れていることに気がついたユウキがいった。

「うん、七不思議ね。いいんじゃない？」

ダイキはかなり適当に返した。

「やる事ないしそれでいんじゃない？」

タクマはもっと投げやりだった。

「お前がやりたかったただけだろそれ」

正直に俺が答えたら、ダイキとタクマの二人にはたかれた。

ユウキが若干へこんだりしたけれど、ユウキの希望どおり”学校の七不思議”を調べることになった。

「よっし、気を取り直して一つ目！音楽室の絵画！」

なるほど、七不思議としてはメジャーだが、割としっかりしていそ
うだ。

「で、音楽室の鍵はあるのか？」

「……（……）シヨポーン」

「……ないのか」

一つ目の不思議、解明不能。

……いきなり出鼻をくじかれてしまった。

「ま、まだ七不思議は6つもあるしな」

ちよつと詰まつたが、ダイキがフォローを入れた。

「そ、そうだな。よし、2つ目！呪いの蛇口！」

あまり聞いたことの無い七不思議だった。

「どついう内容なんだそれ？」

タクマもしらなかつたらしい。ユウキにそう質問すると、

「俺調べでは、教室棟1階の蛇口は呪われてて、午前4時44分に蛇口の前にいると蛇口に吸いこまれる、って話だったぜ」

「……今何時だ？」

「まだ午後11時半過ぎだな」

「……（、）（シヨボーン）」

「……保留だな」

「……だな」

2つ目の不思議、保留。

この後も、七不思議を解明しようとするもことごとく失敗していった。

だけど、俺たちは最後の不思議で、忘れることができない体験をすることになる。

それが良かったことかどうかは解らない。でも、俺は経験しなければならなかったと思っている。

「最後の七不思議！サヨナラの鏡！午前12時に正面玄関の鏡の前に立っていると誰も知らない世界にいつて、二度と帰ってこれないって話だ」

最後の最後にえらく眉唾なものがきたな。そう感じた。

「今何時だ？」

「11時55分。ま、とりあえずいつてみよう。真偽は確かめられると思うよ」

ダイキはそういった。確かに今までののに比べればはつきりする。

俺たちは正面玄関の鏡の前で12時を待った。

ダイキがカウントダウンを始める。

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・」

「0..」

ダイキがカウントダウンを終えた瞬間、鏡が突然光を放ち始めた。

「な、なんだこ」

俺は最後まで言葉を言い切る前に意識を失ってしまっていた。

そして俺は気がつくと森の中にいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112v/>

タイトル未定（仮）

2011年10月8日05時45分発行